

# 札幌彫刻美術館友の会会報

# いずみ

## 第24号

2008年7月1日発行

(題字: 國松 明日香氏)

## 本郷新彫刻シリーズ 24



### 《小林多喜二文学碑》 小樽市旭山展望台

(ブロンズ、登別軟石 高さ4<sup>尺</sup>、幅6<sup>尺</sup>)

本を見開きにしたユニークな造形。本郷新の卓越したアイデアが光る。小林多喜二文学碑建設期成会によって1965年に建立された。

最近、若い人の中で代表作「蟹工船」が読まれ、中国の農村出身労働者の間に多喜二ブームが起こるなど、世界各国で多喜二文学が見直されている。今年が生誕105年、没後75年。これを記念して9月16日から3日間、「多喜二の視点から見た身体・地域・産業」をテーマに、アジアと欧米の研究者50人による国際シンポジウムがオックスフォード大学で開催される。

(写真・文 仲野三郎)

## 目 次

本郷新彫刻シリーズ 24 「小林多喜二文学碑」	表紙
目次 彫刻美術館行事予定	2
ミュージアムの窓辺から「流れる時間の中で」 伊東奈美	3
北海道と鹿児島を深い絆で結ぶ 吉岡達夫	4
ギャラリーそぞろ歩き 梁井 朗	6
八子晋嗣・直子展を終えて 八子晋嗣	7
北を見つめる木下茂太郎 亀谷 隆	8
2008年度友の会総会	10
シンポジウム「美術館の在り方を考える」	11
会員消息プラザ、展覧会案内ほか	12

本館	記念館	散策と美術鑑賞の会	教育普及事業
----	-----	-----------	--------

**本郷新記念札幌彫刻美術館展覧会・行事予定（7月—9月）**

<p>平成 20 年度前期収蔵品展  <b>新たな表現への模索</b>  —省略とデフォルメ—  開催中—8 月 24 日まで</p> <p>具象彫刻家と知られる本郷だが、人体の量感を強調と省略でとらえ、素材を変え、新たな表現を模索した本郷の意外な作品を紹介する。</p>	<p>平成 20 年度前期収蔵品展  <b>遊びの中から生まれた造形</b>  —本郷新を魅了したテラコッタ—  開催中—8 月 24 日まで</p> <p>小樽・春香山アトリエ時代の本郷新のユーモラスなテラコッタ作品の「顔」を紹介、テラコッタの魅力を味わってもらう。</p>	<p>▼7 月 26 日 (土)  ステージⅢ  「宮の森彫刻フェスティバル」</p> <p>▼9 月 27 日 (土)  ステージⅣ  「秋の三角山」</p>	<p>▼7 月 25 日 (金)  サマーコンサート  ▼8 月 1 日 (金)  子ども (小学生) 造形教室</p> <p>▼8 月 5 日 (火)  子ども (中学生) 造形教室</p> <p>▼9 月 23 日 (火)  宮の森サンクスデー (明和町内会無料開放)</p>
--	--	--	--

本郷新記念札幌彫刻美術館 札幌市中央区宮の森 4 条 12 丁目 ☎011-642-5709

◇開館時間：午前 10 時—午後 5 時◇休館日：月曜日 (月曜日が祝日などの場合は翌日)

◇交通機関：地下鉄東西線「西 28 丁目」駅下車 ジェーアール北海道バス「環 20」

山の手環状線 3 番乗り場、「彫刻美術館入り口」下車、徒歩 10 分

## 流れる時間の中で

アルテピアッツァ美唄スタッフ 伊東 奈美

「本当に素晴らしいところですね。数年来の夢が叶ってやっと来ることが出来ました。どこを歩いても気持ちが良いくて、……うまく言葉に出来ません。……とにかく本当に素晴らしくって、感激しています」

そう言って私たちスタッフに微笑んでくださる女性の言葉が、嬉しく胸に響きます。

こんなふうに多くの方が特別の思いを抱いて訪ねてくださり、その方にとって特別な場所となるのが、ここアルテピアッツァ美唄。春夏秋冬、四季折々に多様な表情を見せてくれる豊かな空間です。

美唄市が炭鉱町として栄えた昭和30年代には1200人もの児童が通っていた美唄市立栄小学校の旧木造校舎と体育館。その建物を含む7万平方メートルもの敷地に、美唄市出身の世界的彫刻家・安田侃氏の現代抽象彫刻約40点が点在する彫刻公園。

平成4年の7月にオープンして以来少しずつ作品も増え空間も充実してきました。

この16年の時間の積み重ねが、そのままアルテピアッツァの豊かさとなって来訪者を迎えます。

安田さん自身がその場に立ち、土地の起伏を含めて監修をしている空間では小鳥がさえ

ずり、木々がざわめき、子どもたちの歓声がこだましています。そしてその場の中心にはいつも安田さんの彫刻があり、静かに流れている時間をじっと受け止めているのです。

その時間の流れに心を開放して身を委ねて

くだされば、きっとその方自身が主役となるひとときが待っているはずです。彫刻に触れ、大理石の温かさを心で感じてください。60年の時を刻んだ木造校舎を懐かしんでください。風の心地よさ、芝生の弾力を全身で感じてください。

「また来ます」

この空間に感激をした多くの方がそう言い残し、そして本当に何度も訪ねてくださいます。

アルテピアッツァ美唄には、今日もいつもと変わらない、静かでやさしい時間が流れています。



**アルテピアッツァ美唄** 美唄市落合町栄町  
Tel 0126-63-3137 ▽開館 9:00～17:00 ▽休み  
毎週火曜日、祝日の翌日 ▽入場無料

**おわび** 前号のこの欄、「ミヤノモリシンカ」の執筆者名が札幌宮の森美術館ディレクター村上隆さんとある

のは村田隆さんの誤りでした。おわびして訂正します。

## 北海道と鹿児島を深い「絆」で結ぶ、中村晋也と村橋久成

吉岡 達夫(会員)



中村晋也さん。村橋久成像「残響」と共に  
(鹿児島市の中村晋也美術館 ☎099-246-7070)



知事公館前庭の村橋久成像「残響」中村晋也作  
(札幌市中央区北1条西17丁目)

合掌のポーズ、お釈迦さまのような笑みでもって、通りがかりの旅人である私を出迎えてくれた。今春、鹿児島市在住の彫刻家・中村晋也さんに初めてお会いした時である。

今回の主役は中村晋也さんと、もう一人は村橋久成である。南北1500kmも隔てた鹿児島と札幌を深い「絆」で結ぶのは、この二人なのだから――。

＊

訪れたのは同市郊外の「財団法人中村晋也美術館」(1997 設立)。現存作家のアトリエに隣接した、全国でも稀有な存在。中村さんは1926年三重県生まれ、東京高等師範卒業後、鹿児島大学に着任、以降当地で活動。

館内に入ると、まずは2つの巨大な彫像に驚かされてしまう。騎馬姿の武士像「菊池武光公」(1992)とモーゼを思わせる「太古の血潮」(1981)、共に吹き抜けの天井を突き破るような大型モニュメントだ。

また祈りをテーマに、救いと癒しに昇華させた「ミゼレーレ」シリーズや求道心を具現化した「釈迦十大弟子像」シリーズ等の初期の代表作品から群像、胸像、

レリーフなど、崇高な精神と愛を究めた中村さんの約60年に亘る創作活動の軌跡をたどることが出来る。

そして、在った、在った、村橋久成胸像「残響」を館の入口付近で見ることが出来た。

＊

九州新幹線の終着駅である鹿児島中央駅前にひととき目立つのは、高さ13mの台座にピラミッド状に配置された壮大なモニュメント「若き薩摩の群像」である。日本最初の薩摩藩留学生17人の巨大な群像で、一度見たら忘れられないであろう。

これは郷土鹿児島のシンボルとして、圧倒的な存在感で訴えかけてくる大作だ。

加えて明治の元勳「大久保利通公像」や「島津義弘公像」、「川路利良大警視像」など、歴史上、鹿児島(薩摩藩)にゆかりのあるブロンズ像の多くは、中村さんの作品。

胸像「残響」の村橋久成も薩摩の人で、維新時代の偉人の一人、先の薩摩藩留学生17人の中の一人でもある。今回は中村晋也制作、村橋久成胸像「残響」を巡る旅だった。



若き薩摩の群像（鹿児島中央駅前）



大久保利通公像（鹿児島市高見橋側）



二つの大型モニュメント（中村晋也美術館）



「釈迦十大弟子像」（中村晋也美術館）

1892(明治 25 年)、神戸又新日報に町で行き倒れたまま死んでいた身元不明の男の記事が載った。その男が村橋久成だった。

放浪の末、非業の死を遂げた、エリート村橋とはどんな生き様だったのか。その思いが私の頭からずっと離れなかった。

\*

中村晋也制作の村橋久成胸像「残響」が札幌市の知事公館前庭に建立されている。村橋と北海道の関わりについて、道民の中で何人の人が知っているだろうか。

この男こそ、幕末から維新の激動時代を生き抜き、日本のビール醸造(現在のサッポロビールの前身)の基礎を築いた薩摩人だ。

村橋久成は1842年、薩摩藩島津家一門の家老職にもなれる家柄の出であった。23歳の時、17人の薩摩藩留学生の1人に選ばれ、英国で陸軍術を学び、帰国後、旧幕軍や箱館戦争にも軍監として参戦した。

明治になっても大きな力をもつ薩摩人は、北海道

開拓使の高官として多くが入植した。村橋もその中の1人で、殖産振興に携わり、麦酒醸造所を開業したが、突然辞表を提出。ここから村橋の悲劇が始まった。

\*

——薩摩閥の管財癒着や黒田開拓使長官との軋轢などに嫌気をさしたのでしょうか。村橋は言い出したら聞かない、一途な男のようですね。反骨精神旺盛で潔い態度、それが彼の美德だったと思います。

——「若き薩摩の群像」にも村橋がいますが、これはロンドン時代の写真をベースにしていますから、まだ若々しいですね。札幌の胸像「残響」は、その後、北大で見つかった開拓使時代の彼の写真を基にしています。眼光が鋭いですね。この眼だと思って、力強い村橋像に創り上げました。

——その後、北海道在住の田中和夫さんが小説「残響」(1983)を発表、再び村橋が脚光を浴びて、北の北海道と南の鹿児島の有志が「久成会」を結成、温かい交流が始まりました。今でも続いています。

昨年、文化勲章を受章した中村さん、村橋像制作の経緯をこう語ってくれた。

## ギャラリーそぞろ歩き

梁井 朗 (アートブロガー 「北海道美術ネット」 主宰)

「北海道美術ネット」というウェブ  
サイトとブログを開いているため、月  
に 50 ないし 100 の展覧会を見ていま  
す。職場が札幌の中心部にあるので、  
会社帰りに、ギャラリーに立ち寄るこ  
とも少なくありません。つい敏感にな  
ってしまうのがギャラリーのあいて  
いる時間です。その情報は新聞など  
には載っていないので、自分で確か  
めろしかありません。

展覧会が午後 7 時までであれば、仕  
事のあとで行くこともできるのです  
が、もし 6 時までであれば、正直な  
ところ、相当厳しい。勤務時間が午  
後 5 時までだとしても、午後 5 時  
びつたり職場の玄関を出られる人  
はほとんどいないでしょう。

しかし、最近では、原則 7 時までの  
会場でも、6 時に閉めてしまう例  
も少なくありません。

とくに、作家が家庭の主婦も兼ね  
ていると、夕食の準備などのため、  
6 時以降は会場にいられないとい  
う事情がある場合もあるようです。  
それ以上に考えさせられるのは、  
どこの会場でも聞いてみても、  
6 時以降に来る人がごく少ない  
という実情です。

ギャラリーだけではなく、美術館も、  
これは札幌というより全国的な傾  
向らしいのですが、事情は似てい  
るようです。ときおり新聞の投書  
欄などには、美術館の夜間開館  
を望む声が掲載さ

れますが、実際開けても、観客で  
ごったがえすかという、そんなこ  
とはないようです。

なぜ、夜のギャラリーや美術館を  
訪れる人が少ないのか。けっきょ  
く、勤め人が仕事の帰りに芸術を  
たしなむという習慣が、まだ浸透  
していないということなのではな  
いでしょうか。

ギャラリーや美術館にせっせと足  
を運んでいるのは、カルチャーセ  
ンターに行く暇と金のある主婦  
とか、退職後の老人などが多く、  
社会の中核を担っている層は「忙  
しくてそれどころではない」とい  
うことなのかもしれません。でも、  
それはあまりにもさびしいこと  
だと思います。

そんなことを考えていると、5 月  
24 日に、CAI 現代芸術研究所の  
新しいギャラリーが南大通西 5 丁  
目に開設されるという情報が入  
ってきました。この冊子が配布さ  
れるころにはオープン企画展「サ  
ッポロ・アート展」が始まっている  
ことでしょう。

このギャラリー「CAI 02」は、日  
曜以外、午後 11 時まで開ける  
ということです。これが呼び水に  
なって、仕事の帰りに「ちょっと  
映画館に」とか「ちょっと一杯」  
だけではない、新しい選択肢が  
広がってくれることを期待して  
います。それが、「文化的生活」と  
いうことではないかとも思うの  
です。



## 「八子晋嗣&八子直子展」を終えて

八子 晋嗣(会員)

2008年3月25日から30日までの会期中で「八子晋嗣&八子直子展」を札幌のさいとうギャラリーで行いました。大変たくさんの方がご来場くださり、さまざまなお話をうかがうことが出来ました。これも多くの方のご協力によるものと、作者二人とも感謝に絶えません。ここにお礼を述べさせていただきます。

会期中毎日、色々な方とお話をしている中で、作者も気づかなかった視点で感想をいただくことがありました。そこで、とりあえず作者としてどんなことを考えているのか書いてみたくなりました。

私の場合、作品に向かう時、三通りの入り方があります。一つ目は材料との対話からスタートする方法です。目の前にある素材をどう生かして、どう使って、何をつくらうか。考えながら少しずつつくっていきます。その素材の材質・風合い・色・形などを観察して手を加え、自分の作品にしていきます。小さな作品のほとんどがこれです。

二つ目は自分のアイディアからのスタートです。まず画用紙にスケッチをしたり、小さな木片や紙粘土、粘土などでエスキースを作ったりして考えをまとめます。それからその作品にふさわしい材料探しを始めます。ちょうど良い材料を見つけるまでの時間がかかります。材料さえ見つければ後はあまり考え込まずに作業に没頭できます。

三つ目は上記の二つの併用型です。すでにある素材をどう生かすか考えてエスキースをつくり、アイディアを練ってから本体にかかります。本体を作りながら大きな作品を作るときには大抵こうしています。

どの入り方のときも特にテーマを決めているわけではありません。その時々で「つくりたいものをつくる」つもりでいます。ただ後から作品を見直してみると、それなりに共通している点を見つけます。それは「生命」であり、それを最も身近に感じさせる「家族」と「自然」です。

私は家族で行くキャンプが好きです。それも今流行の便利グッズが盛りだくさんの、屋外リビングルーム的快適キャンプではありません。どちらかと言えば、必要最小限の荷物で不便な生活をするのが好きなのです。そこで必要になるのは、生活の知恵であり、自分の能力です。そこにある自然を生かして生活する。原始的な生活は、自分が自然によって「生かされている」ことを改めて気づかせてくれます。まさに生きている実感がわいてきます。

キャンプしている近くの小川で手ごろな丸太を見つけます。その場でなたを使って荒削りし、家に持ち帰って作品にしたこともあります。こうした行為も私にとっては作品の一部なのです。自分の二本の手が何を生み出していくのか、いつも楽しみで今も作り続けています。

# 北を見つめる木下成太郎<sup>しげたろう</sup>

武蔵野美術大学校友会北海道支部長 亀谷 隆（会員）

今秋、友の会が大掛かりな彫刻清掃を計画している中島公園の木下成太郎像—新聞経営をはじめ、大東文化大、武蔵野美大創設者と知られる木下成太郎とは…

中島公園のボート乗場にひとときわ基壇の高い彫刻がある。それは昭和 16 年（1941）に没した衆議院議員の木下成太郎の座像である。

小柄にしてがっしりした体格に、羽織、袴を身にまとい、口をへの字にした顔付きは、木下の人生そのものを物語っている。

その像の正面に「…大東文化協会興学院更建帝国美術学校…」と彫り込まれており、末には「昭和十六年八月土屋久泰撰朝倉文夫書」とある。



木下家の祖先は豊臣秀吉の一門で、成太郎は慶応元年（1865）、現在の兵庫県に四男三女の長男として生まれた。

14 歳で上京、神田第一中学校に入学、そして東京大学予備門に入学し、漢学、英語を学び、自由党に入党するが、18 歳の時、病のため中退した。

成太郎が中退した明治 15 年、父は成太郎を東京に残し、一家の他 30 人を連れて室蘭に開拓移民として移住した。

残った成太郎は、23 歳の時、自由民権運動に参画したことから、父が住んでいた室蘭で謹慎生活をしながら、函館で英語を教えたり、札幌で新聞を刊行したりした。

成太郎の妹で次女の浜は、登別温泉の開

祖である滝本金之助に嫁いだ。

翌年には板垣退助の勧めで千島を探検し、その帰路、釧路で漁業権の不公平を知り、厚岸町に住むことにした。

厚岸町での成太郎は、ラッコなどの密漁での通訳や、ヨード原料輸入会社の仲立ちなどを行った。とくに、ヨード原料の輸出での昆布灰の価格暴落に疑問をもち、自らヨード製造に着手した。明治 23 年、成太郎 26 歳の時である。

その直後、成太郎は、雑誌『蝦夷の灯』を発行するなどし、29 歳で、北海道庁よりヨード事業の功労者として表彰された。

厚岸の海を見て過ごした成太郎は、自らの意見を文字で伝えることから『厚岸新聞』を発行し、厚岸町議会議員などの要職を歴任し、43 歳で北海道議会議員となり、明治 42 年に成太郎は札幌に移住した。

住まいは、現在の中島公園近くの南 7 条西 4 丁目で、左右対象の和洋折衷 2 階建て、厚岸の家は別邸とした。



議会議員になった成太郎は、翌 43 年『札幌毎日新聞』を発行し、45 年には衆議院議員に立候補し当選した。

国会では、北海道の開拓事業に対する、

国の政策などについて議論し、政界をはじめ財界や教育界に多くの人脈を得た。

明治天皇の崩御により年号が大正となり、50歳になった成太郎は、それまで発刊していた『札幌毎日新聞』を『北海道報』と改称し北3条西1丁目に印刷工場を設けて発行した。

成太郎は教育と文化に対しては非常に熱心で、大正12年(1923)国会に「漢学振興ニ関スル建議案」を提出し、文化を研究する協会と研究所を設立設置し、翌13年、研究所を大東文化学院と改称した。それが、現在の大東文化大学である。また、昭和4年(1929)美術界の精神的向上を目指し、帝国美術学校を創立し、学主となった。それが、現在の武蔵野美術大学までに発展した。

その帝国美術学校の設立について、昭和42年(1967)に刊行された『木下成太郎先生侍』の序で、武蔵野美術大学名誉教授の名取堯は「…先生(木下)がその頃のわが国思想の低下の方向に対する対策は教育にありとするお考えからすでに大東文化学院を創設、その教育に力を注いでいられたと同じ精神で、芸術教育による国民精神の振興ということに深い関心をよせられ、若い私たちの企画に賛成され、当時芸術界の最高スタッフの力を集めて多くの物質的犠牲の上に開始されたもので、本学今日の繁栄はその根幹の培養の深さにあるといわなくてはならぬ…」と述べている。

その後、昭和8年(1933)の国会において「重要美術品等ノ保存ニ関スル法律」を主唱し法律の発布をさせた。

この頃の北海道では長谷川昇、加藤頭清、梁川剛一らによる北海道美術家連盟が結成

されて間もない時期であった。

さらに、11年(1936)には加藤頭清らが日本彫刻家協会を結成し、北海道では成太郎が、北海道の文化を振興させることを提唱し北海道文化協会を設立させた。

日本の国を見直す成太郎は、衆議院議員を務めながら教育や文化の発展に尽力し、16年(1941)には、成太郎を知る道議会議員らが、成太郎を囲んで講話など聞く会として『菊水会』が結成された。



冒頭に記した座像は、この年に菊水会の有志らが成太郎の喜寿を記念して建立した銅像で、建立の発起人として公爵の近衛文磨、伯爵の松平頼壽などがなった。

背面には、16年10月に起工し、17年6月に序幕式を行ったと刻まれている。

この銅像が、戦中の金属回収令において回収されなかったのは、木下成太郎の業績と建立までの経緯や発起人となった人たちの指示があったからであろう。

長年、野外彫刻調査保存会の会員で、武蔵野美術大学彫刻科教授の黒川弘毅氏は「今まで、武蔵美の創立者の銅像があることも知らなかったのと、朝倉文夫の戦前における作品が残されているのは極めて貴重なことである」と評価を述べている。

# 2008 年度札幌彫刻美術館友の会総会

会則改定 会の名称そのまま 事務局は会長宅に

## 役員任期 2 年に延長

札幌彫刻美術館友の会の 2008 年度総会が 5 月 11 日、札幌教育文化会館に会員約 50 人が出席して開かれ、08 年度事業計画、予算ほか会則改正、新役員などを原案通り可決した。



総会は桑原昭子さんの司会、鈴木敏明さんの開会宣言に続いて、議長に松原安男さんを選出。平成 19 年度事業報告、同決算・監査報告があり、いずれも報告通り承認された。続いて

平成 20 年度事業計画として、総会終了後に引き続き開催されたシンポジウムほか美術館支援策、

例年実施している会員研修を目的にした美術館巡り、作家アトリエ訪問、近郊日帰りバスツアー、広報活動として会報「いずみ」の年 4 回発行、彫刻関連ビデオの作成、野外彫刻解説記事作成事業などが提案された。また、野外彫刻清掃・保全事業として宮の森地区（5 月 26 日）、中島公園（6 月実施予定）、大通公園（9 月同）での活動予定が挙げられ、さらに本郷新とも深い交流があった彫刻家・山内壮夫生誕 100 周年記念事業、札幌市内野外彫刻地図作成が新規事業計画として提出された。さらに、新年度予算は収入、支出とも 104 万 6470 円とし、主な支出に本郷新記念札幌彫刻美術館会員入館料補助 3 万円、シンポジウム費 3 万円、会員研修費 45 万円、会報発行など広報事業費 27 万円ほかを計上、いずれも提案通り可決した。

このほか役員任期を 2 年にするなど友の会の会則改定案（詳細は前 23 号会報に掲載）、役員改正（別項）を原案通り認めて閉会した。

**第 1 回役員会開催 毎月第 2 木曜を定例役員会に** 新年度役員初の初会議が 5 月 26 日開催され、各役員の出欠などを決めたほか、原則として、毎月第 2 木曜日に定例役員会を開くことにした。本年度の日程は 7 月 10 日、8 月（休会）、9 月 11 日、10 月 9 日、11 月 13 日、12 月 11 日（以降、未定）とし、必要があればそのつど開会する。

### 2008 年度友の会役員

（敬称略）

会 長	橋本 信夫
副会長	斎藤美年子
	大内 和
幹 事	高橋 淑子
	仲野 三郎
	長峯 慰子
	松原 安男
	桑原 昭子
	田中 和子
	大竹 明子
	大地 淳
	吉田 修子
	吉岡 達夫
	佐々木保枝
	伊藤 百子
	奥井 登代
	猪股 岩生
	石川 博司
	坂崎健治朗
監 査	濱 久子
	高津多香子

## 報告

# シンポジウム「美術館支援の在り方を考える」

美術館を支えるボランティア活動と支援を受ける館側との理想的な関係を模索するシンポジウム、「美術館支援の在り方を考える」が5月19日、札幌・教育文化会館で友の会総会に引き続いて行われた。パネラーに招かれた塩澤正樹（札幌市観光文化局文化部長）、長峯慰子（友の会会員・道立近代美術館協力会理事）、木村純（北大高等教育機能開発センター生涯学習計画研究部教授）の3氏の基調報告を紹介する。

## 塩澤氏 多様性の認識 相互に

美術館を管轄する行政の立場から、美術館とボランティア活動を取り巻く現状と課題についてさまざまな角度から言及し、「個々人のボランティア活動の動機、内容が多様化していると同時に美術館に求められるものも多様化しているので、多様化への対応、ボランティア活動への適正な評価が必要である」と指摘した。また、美術館が地域コミュニティとしての拠点となる考え方がますます重要になるので、「設置者としての自治体はむろんのこと、美術館、ボランティアが互いに多様性をしっかり認識することからスタートしなければならない」と強調した。

## 長峯氏 共に学ぶ謙虚な姿勢を

日頃、ボランティア活動を行っている自身の体験を通して、「芸術文化の殿堂、知識の宝庫である美術館と地域の橋渡しとなるよう願って活動している」と信条を披露、「館の担い手、館の理解者として、ボランティアだから出来ることがある。館の職員との共同活動こそ芸術文化が育まれる土壌になるのではないかと活動の心構えを語った。さらに、「美術館側にはボランティアの存在が負担になるとの声もあるが、それでは我々の活動は徒労に終わる。お互いもっと謙虚になり、職員と共に学ぶ姿勢が求められる」とし、立場は違っても同じ目的を持ち、尊重し合いながら活動することが大切であり、信頼関係を築く努力をし、楽しい汗を流す活動を継続することがボランティアの魅力ではないかとアピールした。

## 木村氏 参加と協働がキーワード

専門家の立場からボランティア活動に関する豊富な調査データなどを基に、ボランティアの美術館支援を「来館者に対する支援であり、美術館のパートナーとしての自己実現であり、社会参画の場でなければならない」と定義した。行政（美術館）との関係については「指定管理者制度の導入などで、行政は館の存続を図るため、地域住民とのつながりを深めなければならない事情がある。そのためにはボランティアの役割が不可欠。したがって、館とボランティアは『参加』と『協働』をキーワードに施設の運営、街づくりを進めていかざるを得なくなる」と指摘した。

## 開拓の村ボランティアの依頼で彫刻解説

友の会の松原安男さん、高橋淑子さん、長峯慰子さんらが5月28日、開拓の村ボランティアの依頼で大通公園に点在する野外彫刻の解説を行った。これは昨年、友の会がバスツアーで同ボランティアと交流したのがきっかけ。市役所ロビーにある山内壯夫「島判官像」のほか大通12丁目にある佐藤忠良「若い女の像」など14点を2班に分けて見て回り、参加者から「知らないことが分かって楽しかった」と好評だった。

## 宮の森地区彫刻清掃

彫刻美術館がある宮の森地区の野外彫刻清掃作業が昨年に続き今年も5月26日に友の会と地域の明和町内会住民の協力で行われた。宮の森緑地の「太陽の母子像」「奏でる乙女」と明和町内開館前にある「鳥を抱く女」の3体を清掃、初めて参加した人たちは改めて彫刻への関心を高めていた。

## 会員 交流フラガ

### ■鈴木敏明さん芸森前で喫茶店開店■

札幌・芸術の森入り口前にこのほど喫茶店「di difronte allarte」(ディ フロンテ アッラルテ)をオープン。木立に囲まれたしゃれたドアから店内に入ると大型スピーカーに今では珍しい真空管のアンプとレコードプレーヤーが目につく。「芸術鑑賞の後、木もれ日の中、レトロな雰囲気でお茶をどうぞ」とマスターの鈴木敏明さん。(札幌市南区常盤4-2-17 TEL011-827-5181 11:00~20:00 月休)

## 展覧会案内

◇関口雄揮の三つの時代展 (7月8日—10月26日) 関口雄揮記念美術館 (南区常盤3-1)

◇交差する視点とかたち4人展 (7月19日—27日) コンチネンタルギャラリー (中央区南1西11)、阿部典英、下澤敏也ほか。

◇鶴沼人士(道展会員) 個展 (9月15日—20日) 札幌・時計台ギャラリー (中央区北1西4)

◇国松明日香展 (10月5日—11月26日) 札幌・芸術の森美術館 (南区芸術の森2) 初期の版画作品ほかモニュメント、最近の鉄の作品など40点を紹介する。

◇OKUI MIGAKU ギャラリーコンサート 8月31日(日) 午後3時から、「若きバイオリニストを迎えて」として、尾張拓登(バイオリン)、後山美菜子(ピアノ)の演奏。(中央区旭ヶ丘5-6-61)

**おわび** 前23号に下記の誤りがありました。おわびして訂正します。

▽表紙「本郷新彫刻シリーズ23・石川啄木」で「美術評論家、佐藤四満美」は「佐野四満美」の間違いでした。▽9 ページ「会則改定案まとまる」の末尾に「委員長が召集する」が脱落していました。

札幌彫刻美術館友の会会報「いずみ」No.24

2008年7月1日発行

発行人 橋本 信夫

編集スタッフ 斎藤美年子：011-643-7246

大内 和：011-884-6025